

1

〈基本問題〉

問一 A カ B エ

問二 ア

問三 ウ

問四 遺伝の法則によって受けついできたもの〔だから。〕

問五 ④ 例 ライオンやフクロウの狩り（がすばらしいこと）

⑩ 例 親を世話して子をたくさん産ませること

問六 道具で食べる

問七 人間の命があやうくなる

問八 ⑦ イ ⑧ カ

問九 今の欲望を～できるのだ

問十 イ

問十一 イ

問十二 イ・オ

解説

出典は、中原正木「人は足から人間になった」より。

問一 Aは、「目で、翼で、あしと爪とくちばしで、胃で」（18行め）を「全身で」（19行め）と言い換えているので、（言い換え）。Bは、「原始時代の人間の道具はちがいます」（33行め）と前の内容を否定しているので、（逆接）。

問二 傍線部後を読むと、牙は「食べ物をかみ砕くためのしくみでは」（1・2行め）なく、「えものに、逃げるひまなく～殺すための『武器』」（2～4行め）とあります。〈→ア〉

問三 5～17行めでは、フクロウがネズミを捕らえて食べるまでの様子が説明されています。これらをまとめた説明が、18・19行め「フクロウは、目で～全身でネズミを食べる」という記述です。つまり、フクロウはネズミを狩るために非常に適した体のしくみを持っていて、狩りが上手なので、「ネズミ食い商売」と言っているのです。

問四 傍線部「それ」とは、「ライオンが、かりに～具合いいように変えよう」（26・27行め）とすることです。変えることが「無理」なのは、ライオンの牙は「自分でつくり出したものでは」（24行め）なく、「遺伝の法則によって受けついできたもの」（25・26行め）だからです。傍線部に指示語などが含まれている場合、その内容を明らかにしたうえで問いに取り組むことが大切です。

問五 指示語は基本的に前の内容を指すことが多いです。④は「ライオンやフクロウの狩り」がその後の文脈に合うため適切です。⑩は直後に「手伝った」とあるので、「動物の子ども、なんともいえないかわいらしさ」が何を手伝ったのか確認します。前を見ると、「動物の子を育てるだけでなく、親を世話して子をたくさん産ませること」とあり、「子どものかわいらしさ」がそれらを促進させたことがわかります。

問六 「知恵で食べる」とはどういうことかは、直後の文章で「人間は道具を～捕えて食べた（46・47行め）と説明されています。これは、20～22行めで述べられていることと重なり、「道具で食べた」（22行め）とまとめられていますね。ただこれでは「食べる」という語尾に合わないので、73行めの「道具で食べる」を解答とします。

問七 傍線部全体を読むと、「『マンモスの狩人』の知恵が向上すればするほど」人間の未来に影がさす、つまり人間にとって何かマイナスなことになる、ということがわかります。次の段落を読むと、「マンモスの子孫づくりはとてみたいへん」（52・53行め）で、「親が一匹殺されると～滅亡に近づ」（53・54行め）とあります。そうすると人間の食べ物がなくなっていくことになるので、「人間の未来に影がさす」ことになるのです。80～82行めでこれらをまとめており、「人間の未来に影がさす」ことを「人間の命があやうくなる」と言い換えています。

問八 まず傍線部の「強い動物」とは、51行めにあるように「マンモス」を指し、「弱い動物」とはネズミを指します。「子孫づくりについては、マンモスはひ弱」（54・55行め）で、一方ネズミは「いくら食われても滅びることは」（60・61行め）ないほど子孫づくりにおいては強いのです。

問九 傍線部直前を読みましょう。「という」とあるので、前に「将来への予測」と同じ説明があることが予想できます。

問十 45行めで「人間は、『知恵で食べる』のだと言うこともできましょう」とあり、続く46行めからその内容が説明されています。人間が上手く食べものを獲得してきたのは「知恵」のおかげだとわかるので、空欄には「知恵の勝利」が入ると予想できます。

問十一 まず食物連鎖とは、「動物たちが～しくみのこと」（62・63行め）です。動物たちは「食べたり食べられたり」する関係にあることをおさえた上で確認すると、「食われて」（66行め）とあるのでⅠには「食べられる」が入ります。また「ある位置にいる動物」（64行め）が増えると、それを食べる動物にとっては「食物が豊富」（67行め）な状態になります。したがって、Ⅱには「食べる」が入ります。

問十二 83～101行めの内容からイ、20～22行めや33～48行めの内容からオが適切です。

2

〈基本問題〉

問一 イ

問二 例 人間の持っている無限の可能性は、おとなの場合は仕事によって引き出されていく。

問三 エ

問四 イ

問五 ア

問六 ウ

問七 エ

問八 エ

問九 ア

問十 エ

問十一 山登り

問十二 イ

問十三 例 学校にいるみなさんの仕事は学習なので、自分の可能性を引き出し、能力をつくり出すために、学習を積み上げていってほしいということ。

解説

出典は、^{さいとう きはく}斎藤喜博「君の可能性」より。

問一 例外もありますが多くの場合、最終段落に文章のまとめがあります。⑫段落を読むと、「可能性を引き出し、能力をつくり出す」という内容が何回も繰り返されていることがわかります。

問二 「無限の可能性を引き出す方法」がこの段落の要点です。ここでは「おとなの場合」と限定されて説明されています。5行め以降は具体例になるので、要点のまとめには入れないよう注意しましょう。

問三 接続詞や語尾に注目します。①「ある程度のことはわかっている」、②「絵をかきはじめる」は連続した関係になっています。また、③には「そして」があるので②から連続した内容、また③④⑤の語尾はみな「ときもある」なので、並列した関係だとわかります。

問四 「そういうこと」とあるので前の段落の内容を確認します。②段落では「確かなものに～絵をかきはじめ」（10・11行め）ですが、「わからなくなってしまう」（12行め）ったり、「はっきりしてくるときもあ」（13行め）ったりすると述べられています。

問五 一見、例示の接続詞が入りそうですが、段落最後まで読みます。すると「話も生まれて

くるのである」とあるので、空欄には順接の接続詞が入ります。

問六 問四と似た問題です。前の段落を確認します。「いままではっきりしていなかった～自分の能力をつくり出していく」(33～36行め)ことが、科学者や他の実際の仕事をしている人たちの「仕事」なのですね。

問七 「ほねおり～のぼりつめると、そこにはあたらしい世界がある」(44・45行め)の後に「高い山がそびえ」たっていると前後で予想しない反対の内容があるので、Aは「けれども」。Bは「よりけわしい未知の山～登りはじめなければならない」(47・48行め)の後に「いままでみえなかったようなものがあり～あたらしい山が見えてくる」とあるので、添加の接続詞「そして」。Cの前では「教えられていた」とあり、後には「そうではない」とあるので、逆接の接続詞「けれども」。

問八 ⑦段落冒頭に「それは山登りのような作業である」という一文があります。この文から、⑦段落全体が「山登り」に例えた説明であること、また「それ」とあるので⑥段落の内容をうけたものであること、が推測されます。⑥段落では、「一つのを確かにしたり～高いものをめざして努力」(39～41行め)する、ということが述べられていますね。これが選択肢のエに合致します。

問九 傍線後でニュートンが万有引力を発見した「きっかけ」について説明しているので、傍線部の「そうではなく」は、リンゴが木から落ちるのを見たことが発見につながったのではない、という意味になります。

問十 ⑪段落を読みます。ニュートンによる重要な発見には三十年以上の努力の積み重ねがかかっており、「仕事によって自分の可能性を引き出すということも、それと同じ積み上げがなければならない」(69～71行め)とあります。

問十一 問八でみたように、可能性を引き出していく仕事を筆者は「山登り」(44行め)と例えています。

問十二 ①段落では問二でみたように「無限の可能性を引き出す方法」が述べられています。②～⑤段落では画家や小説家、科学者の場合について書かれ、⑥～⑧段落では仕事を積み重ねていくことについて説明されています。⑨～⑪段落では⑥～⑧段落を基にニュートンの万有引力の発見について述べられ、⑫段落で文章全体がまとめられています。

問十三 その後に続く文章をまとめます。①～⑪段落の内容から、「学習することが仕事」(75・76行め)、「学習を積み上げていく～能力をつくり出す」(76～78行め)をキーワードとして捉えられると良いです。

4

〈基本問題〉

問一 1 エ 2 ア 3 イ 4 ウ

問二 ウ

問三 イ

問四 1 A 2 B 3 A 4 A 5 B

問五 徹底的に議論をたたかわす

問六 1 ウ 2 しかしその 3 無関心の雰囲気が漂う

問七 一人ひとりを活かすような社会

問八 1 誰もが対等な関係を前提としておこなわれたコミュニケーションに基づく合意形成。

2 自分の意見を言わないことが美德だという考え。

問九 イ

解 説

出典は、山脇直司「社会とどうかわるか 公共哲学からのヒント」〈岩波書店〉より。

問二 「身内以外の他者は～和辻哲郎（一八八九—一九六〇年）という日本を代表する思想家が強調したように、そもそも人間という言葉は、それが人と人との『間柄的な存在』であることを示しています」（11～15行め）から読み取れる筆者の考えに近いものを選びます。

問三 「疑心暗鬼」という言葉の意味は、「疑う心があると、暗闇でいるはずのない鬼がみえてしまうように、一旦ある人に不信感をいだいてしまうと、その人の何気ない言動でもいろいろに勘ぐってしまうような状態」（28～30行め）です。

問四 「他者との公共的なコミュニケーション」（45行め）のうち、「こうした消極的な役割」がさしている③～⑤段落から、「消極的な役割」として、「とらざるをえない」（19行め）コミュニケーション・「誤解を正すこと」（24行め）があげられています。「積極的なもの」については、⑥段落に、「公共的なことがらに関して『合意』を形成することは、コミュニケーションの重要な役割のひとつ」（47～49行め）とありますから、どちらにあたるか、検討します。

問五 傍線部は、問四で確認した、コミュニケーションの「積極的な」役割について、その様子を説明しているものですね。ですから、「公共的なことがらに関して『合意』を形成する」（47・48行め）様子を説明した他の表現を探します。「誰もが対等な関係を前提としてコミュニケーションをおこない、それに基づいて合意形成する」（68・69行め）、「このような合意形成は～徹底的に議論をたたかわすような文化は根づいていない」（71～75行め）

などに注目します。

問六 1 「減」はほろぶ（ほろぼす）、「奉」は高い地位におくことを意味しますから、字を見ただけでもだいたいの意味はつかめるでしょう。 2 「減私奉公」型の社会について説明している、「『減私奉公』型の組織や社会では、一方的に上から命令が下る上意下達でルールが決められます。しかしそのような決め方では、みんなが納得する公正なルールをつくるのは難しいですし、新しいアイデアを生み出しにくくなることは、みなさんの日常生活を想像してもわかることでしょう」（56～61行め）に注目して、「問題」がわかる文を探します。 3 「減公奉私」型の社会について説明している、「『減公奉私』型の社会では、コミュニケーションを通してのルールづくりについては、どうでもよいような無関心の雰囲気（ふんぎ）が漂（ただよ）うでしょう。残念ながら、学校生活においても、勉強だけしていればいい、あるいは話し合いなど面倒だ、という雰囲気になってしまっているところがあるかもしれません」（62～66行め）に注目して、「問題」を説明した文にあてはまる表現を探します。

問七 問六 1と同様、漢字の意味に注目すると、「私を活かす」「公に対して開く（＝コミュニケーションをする）」という「社会」である、また、直前の「この本が打ち出したい」（67行め）から、肯定的な表現であると考えられます。すると、「一人ひとりを活かすような社会」（36行め）が見つかります。

問八 1 指示内容、「誰もが対等な関係を前提として～合意形成すること」（68・69行め）の部分で、「～合意形成。」という文末につながる形にまとめます。 2 傍線部を含む一文を「つまり」と受けて、次の文で言い換えて説明しています。「徹底的に議論をたたかわすような文化は根づいていないという考え方」（74・75行め）が傍線部の言い換え、「日本では自分の意見を言わないことが美徳とされており」（73・74行め）が、その根拠となる、日本人の考えです。

問九 一つめ（①段落）：問題提起「身内以外の他者との意思疎通するためのコミュニケーション」（8・9行め）。二つめ（②～⑤段落）：「他者との公共的コミュニケーション」（45行め）の「消極的な役割」（46行め）。三つめ（⑥～⑨段落）：「他者との公共的コミュニケーション」（45行め）の「積極的なもの」（46行め）。

〈発展問題〉

問一 1 カ 2 イ 3 エ 4 ア 5 キ 6 ウ 7 オ

問二 例 目に見えないが生きていく上に非常に大切な知恵を身につけるためだ。

問三 長所 例 どうでもいいようなことや、いやな出来事、腹立たしいことなどを忘れ、日常生活を過ごしやすくする点。

短所 例 苦勞して覚えた知識を忘れてしまう点。

問四 例 すぐ取り出せるわずかな情報に対する、すぐ取り出せないが脳に蓄積されている大量の情報の比率の大きさ。

5

〈基本問題〉

問一 A ア B イ

問二 〔第二〕 「この前の
〔第三〕 いつからな

問三 例 人の心の中の声を聞きとれる〔力〕

問四 ウ

問五 (金色の夕

問六 イ

問七 例 ほかの人(脇田)のほうがいいが、その人にはふられそうな気がするから、つきあってくれそうなわたしにしたということ。

問八 日曜日は塾

問九 「だれかさ

問十 エ

問十一 あ、日～言えよ

問十二 エ

問十三 オ

問十四 はしなかった。

解 説

出典は、芝田勝茂「きみに会いたい」〈あかね書房〉より。

問一 A「そぞろ」は、「なんとなく」といった意味があります。そぞろ歩きとは、あてもなく歩き回ることです。Bの「オブラート」は、もともと飲みにくい粉薬などをつつんで飲むのに使用したものです。つまり「オブラートにくるむ(包む)」とは言い難いことを「遠回しな言い方をして伝えること」です。

問二 物語文を区切る際には、場所や時間に注目すると良いでしょう。冒頭から40行めまでは「駅の踏切を渡り、坂道にさしかかろうとしたとき」(3行め)に聞こえた声についての場面です。41～81行めでは男の子との会話シーン、82行め以降は「わたし」の心の中を通して「わたし」がもつ力について描かれています。

問三 問二でみたように、「わたし」の力について説明されているのは82行め以降でした。120・121行めで「わたしは、みんなの心の声が聞こえてしまう」と述べています。指定字数に気をつけて、「～力」に続くよう書きましょう。

問四 傍線部前の「きみ」とは、6～8行めの声の主のことです。問三でみたように「わたし」は人の心の声が聞こえてしまうことで傷ついていました。傍線部は比喻表現であり、「いるんだ～不幸な子が」(30行め)とあるように、「きみ」も「わたし」と同じように、人の心の声に傷ついているのだとわかります。

問五 さっきの声とは、「きみ」が発した声、つまり6～8行めの声のことです。

問六 傍線部前で、「わたし」は男の子に話しかけられても黙っています。つまり「自分で返事を言えない」という意味なのだわかります。

問七 「だれがそんなこと言ったんだ!」とあるので、その前の「わたし」の発言をみると、「だれかさんにはふられそうな気がするから～つきあう気はないの」が見つかります。この「だれかさんには～わたしにしとこう」というのは、男の子の心の中の声であり、直接は言っていない。

問八・九・十一 41行めから始まる男の子の会話ですが、相手の発言の後についている()の中の言葉は、「わたし」に聞こえる男の子の心の声です。「日曜日、ひま?」(68行め)と聞きますが、その後の発言には「あ、日曜日は塾か～ほら、言えよ」(68～70行め)とあり、これは心の声だと推測できます。よって空欄に「日曜日は塾」を入れてみます。すると73行めの「わたし」の発言を聞く男の子にとっては、日曜日に塾があることを「わたし」に言っていないのに伝わっている、ということになるので、驚き、「カウンター・パンチをくらったような顔」になったのです。同じように、「だれかさんには～つきあう気はないの」(57・58行め)という「わたし」の言葉は、53～55行めの心の声を読み取ったものなので、「だ、だれが」(61行め)と男の子はまるで「パンチ」を受けたかのように動揺しています。

問十 77行めより前の男の子の発言後には全て()がついています。心の中で思ったことを口には出していません。しかし、77行めの言葉は実際に口に出しています。おそらく今までだったら心の中で言っていた言葉であり、「やっと、正直に言った」と「わたし」は思っています。イは心の声を出さないだけで、「うそばかり」ではないので、不適切です。

問十二 98行めに「そうしているほうが無難だから」とあります。なぜ無難なのか考えながら読み進めると、「だれかが何かで～渦巻くこと」(101・102行め)だと「わたし」は考えています。つまり、矢面に立つことで「自分が傷つく」(111行め)ことを恐れているのです。また、「他人はどうでもいい」(110行め)と言っているのも、ウは不適切です。

問十三 「みんなの心の声が聞こえてしまう」(120・121行め)「わたし」は、「ちらりと～傷つけられ」(122・123行め)ていました。128行めの罵声も、「だれにもわかるまい」(129行め)とあるように、口に出して言われたのではなく、心の中で言われたものです。

問十四 118・119行めに、「どんなにひどいことを他人に思われても、当の本人たちはだれも

死にはしなかった」とあります。「あんなふうに思われるくらいなら死んだほうがましだと思」(115・116行め)うほどなのに、死にはしなかったのは、それが心の中だけの話題だったからですね。

〈発展問題〉

問一 イ

問二 例 「ひなをつれて」というあんちゃんのことばで心に浮かんだ、母鳥にまつわりつくひなのようすが、母を亡くした私にかつての私と母の姿を思い出させ、心ひかれたから。

問三 例 コジュケイをつかまえるつもりはなかったが、役めをはたせず感じていたうしろめたい気持ちを少しでもまぎらそうと思ったから。

問四 例 親鳥がつばさを羽ばたかせて飛び立ち、魚屋の手の届かない空高くに逃げてしまったということ。

問五 エ

問六 例 母の死という現実を直視できず、悲しみやさびしさをまぎらしながらも、亡き母を慕う気持ちにとらえられていた。コジュケイの家族は無事だったが、もし、母鳥がつかまったら、ひなたちはどうやって身を守るのだろうと考えた。そして、母を失った悲しみをのりこえ、一日も早く自立しなければならないという気持ちになった。

解説

出典は、舟崎克彦「雨の動物園」より。

問一 ——線部を含む7～10行の一文は、「昭和二十七年、夏」「その同じ年の六月に母に死なれ」た「私」が「始終この家(祖父の家)に遊びにきていた(自分の家にいたくない)」理由を述べています。「七歳の子どもには、灯明のゆれる祭壇や線香のたなびく広間のようすがなんとなくおそろし」かったことが一つです。——線①が二つめの理由ですが、「どこからどこまで母のにおいがしみこんだわが家が帰りづら」かったのはなぜか、問われています。「どこからどこまで母のにおいがしみこんだわが家」とは、家の中にあるなにもかも、すべてのものが母親の思い出に結びついている、家の中にある何を見ても母親を思い出す、ということを表しています。主人公の「私」はまだ七歳です。自分の家に入れれば、何を見ても、何に触れても母親を思い出さずにはいられない、しかし、その母親は、もういない——そのたびに悲しみがこみあげてくることでしょう。悲しみしか感じられない場所にいたいとは思わない。だから始終、祖父の家にやってきて、悲しみを紛らしていたのです。

問二 魚屋のあんちゃんにコジッケ(コジュケイ)をつかまえにいこうと誘われ、「私」自身が、コジッケのいる場所に行こうという気持ちになったことが描かれている場面に一旦戻ります。「私」の心が動いたのは、「ひなをぞろぞろつれて歩いているんだよう。早くいかねえと逃げっちまうぜ」(23・24行め)という魚屋のあんちゃんの言葉を聞いた直後で

第1・2回 和語・外来語

- ① ① なれなれしい ② すがすがしい ③ ずうずうしい ④ たどたどしい
 ② ① ボランティア ② プライバシー ③ リサイクル ④ イノベーション
 ③ ① エ ② イ
 ④ ① エ ② カ ③ キ ④ オ ⑤ ケ
 ⑤ ① ア ② ア ③ イ
 ⑥ ① ゆだね ② うやうやしく ③ ねぎらっ ④ いぶかしく ⑤ たじろが
 ⑦ ① エ ② イ ③ ウ ④ イ ⑤ ア
 ⑧ ① オ ② ウ ③ ア
 ⑨ ① D・仮想 ② B・制度 ③ E・災難
 ④ A・展望 ⑤ C・使命
 ⑩ ① オ ② イ ③ カ ④ エ ⑤ キ
 ⑪ ① オ ② ウ ③ ア ④ イ ⑤ エ

第3・4回 慣用句

- ① ① イ ② ア ③ ウ ④ ク ⑤ エ ⑥ キ ⑦ カ ⑧ オ
 ② ① ウ・手 ② エ・気 ③ イ・唱 ④ オ・会心(満面) ⑤ ク・交
 ③ ① ウ ② イ ③ ア ④ エ
 ④ ① えり・ク ② なげる・オ ③ こらす・カ ④ たつ・イ
 ⑤ ① 抜く ② 痛い ③ 持つ ④ 利く/肥える/高い
 ⑥ ① 火 ② 空 ③ 目 ④ 馬/息/性/肌 ⑤ 歯
 ⑦ ① 念 ② 群 ③ 氷 ④ 仏 ⑤ 都
 ⑧ ① ねずみ・イ ② すずめ・オ ③ きつね・ウ ④ つる・ア
 ⑨ ① 腹 ② 目 ③ 首 ④ 鼻 ⑤ 手
 ⑩ ① エ ② ウ ③ オ ④ イ ⑤ ア
 ⑪ ① イ ② ウ ③ ア

第5・6回 ことわざ・故事成語

- ① ① 9 ② 13 ③ 10 ④ 19 ⑤ 99
 ② ① 川・キ ② 馬・イ ③ 鳥・ウ ④ 魚・エ ⑤ 功・オ
 ③ ① イ ② エ ③ オ ④ ア ⑤ ウ
 ④ ア 8 イ 2 ウ 6 エ 9 オ 5
 ⑤ ① ウ ② ア ③ イ ④ オ ⑤ エ ⑥ カ
 ⑥ ① A ウ B く ② A ク B き ③ A キ B え
 ④ A カ B う ⑤ A オ B い ⑥ A エ B あ
 ⑦ A ア B お ⑧ A イ B か
 ⑦ ① ウ ② イ ③ ア ④ オ ⑤ エ

- ⑧ ① 降 ② 城 ③ 超・鳥 ④ 善 ⑤ 先
 ⑨ 〈例〉① つかまえる ② のぞく・なくす ③ あげる・える

第13・14回 ことばのきまり ①

- ① ① ア ② ウ ③ × ④ ア
 ② ① 花が ② 父は ③ 大空は ④ 私は ⑤ 母は
 ③ ① イ ② オ ③ エ ④ ア
 ④ ① エ ② オ ③ コ ④ カ ⑤ ウ ⑥ カ ⑦ イ
 ⑤ A おっしゃった B くださる C うかがって D ○ E ○
 ⑥ イ・ウ
 ⑦ ① う ② い ③ く ④ がす
 ⑧ ① 12 ② 10 ③ 7 ④ 4 ⑤ 心 ⑥ 方 ⑦ 田 ⑧ 口
 ⑨ ① さんずい ② つちへん ③ ごんべん ④ ころもへん ⑤ きへん
 ⑥ いとへん ⑦ こざとへん
 ⑩ ① 5〔画〕 ② 9〔画〕 ③ 11〔画〕 ④ 8〔画〕
 ⑪ ① 1〔画め〕 ② 4〔画め〕 ③ 2〔画め〕

第15・16回 ことばのきまり ②

- ① ① エ ② エ ③ ア ④ ウ ⑤ イ ⑥ ア ⑦ イ ⑧ イ ⑨ ア ⑩ ア
 ② ① ウ ② ウ ③ イ ④ ア ⑤ ア
 ③ ① ア ② ア ③ ア ④ ウ ⑤ ウ
 ④ ① イ・エ ② ア・ウ ③ イ・エ ④ ア・エ ⑤ ア・ウ

漢字の学習 第一回

- | | | | | |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| 1 訪問 | 2 招く | 3 混ぜる | 4 経験 | 5 案外 |
| 6 機械 | 7 損ねる | 8 現象 | 9 借りる | 10 達成 |
| 11 穀物 | 12 固有 | 13 迷う | 14 補う | 15 至難 |
| 16 光景 | 17 誤る | 18 無視 | 19 感謝 | 20 似 |
| 21 喜ん | 22 温暖 | 23 支える | 24 検査 | 25 就職 |
| 26 から | 27 きせい | 28 ころ | 29 けはい | 30 ようい |

漢字の学習 第二回

- | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|-------|
| 1 得意 | 2 栄養 | 3 状態 | 4 朗読 | 5 孝行 |
| 6 鼻 | 7 刻む | 8 基準 | 9 負傷 | 10 訓練 |
| 11 際限 | 12 立派 | 13 冷め | 14 意義 | 15 対策 |
| 16 大勢 | 17 意外 | 18 積み | 19 訪れる | 20 専門 |

- | | | | | |
|--------|----------|--------|--------|---------|
| 21 直ちに | 22 額 | 23 不思議 | 24 保護 | 25 暖かい |
| 26 とな | 27 ぎょうそう | 28 あ | 29 つごう | 30 えしゃく |

漢字の学習 第三回

- | | | | | |
|--------|---------|---------|-------|---------|
| 1 預かる | 2 砂糖 | 3 収める | 4 備え | 5 署名 |
| 6 視線 | 7 故障 | 8 期待 | 9 約束 | 10 反らし |
| 11 看板 | 12 器用 | 13 展覧 | 14 救済 | 15 勤勉 |
| 16 絶対 | 17 予測 | 18 要領 | 19 築く | 20 観測 |
| 21 痛い | 22 帰省 | 23 幼い | 24 典型 | 25 規則 |
| 26 しだい | 27 ちょぞう | 28 きちょう | 29 かな | 30 はんのう |

漢字の学習 第四回

- | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|---------|
| 1 囲む | 2 耕す | 3 吸収 | 4 困る | 5 営む |
| 2 反映 | 7 輸入 | 8 対象 | 9 臨む | 10 観察 |
| 11 群れ | 12 納得 | 13 粉末 | 14 独創 | 15 発展 |
| 16 退治 | 17 視界 | 18 提案 | 19 預金 | 20 忠告 |
| 21 延びる | 22 測定 | 23 燃え | 24 帯びる | 25 貯蔵 |
| 26 た | 27 まか | 28 ゆらい | 29 もう | 30 けいだい |

漢字の学習 第五回

- | | | | | |
|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1 構える | 2 拾う | 3 拝む | 4 測る | 5 複雑 |
| 6 裁く | 7 備える | 8 発揮 | 9 効き | 10 慣れ |
| 11 気配 | 12 刻む | 13 展覧 | 14 預ける | 15 縮める |
| 16 垂れる | 17 営む | 18 務める | 19 夢中 | 20 容易 |
| 21 勤める | 22 群れ | 23 帯 | 24 似る | 25 厳しい |
| 26 けわ | 27 ところ | 28 そな | 29 ひたい | 30 すあし |

漢字の学習 第六回

- | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|--------|
| 1 寒暖 | 2 対象 | 3 任せる | 4 観察 | 5 不思議 |
| 6 機能 | 7 訪れる | 8 印象 | 9 誤り | 10 修める |
| 11 延びる | 12 領域 | 13 収拾 | 14 想像 | 15 簡単 |
| 16 導く | 17 口調 | 18 治める | 19 競争 | 20 穀物 |